房総・伊保田沢（仮称）

メンバー:塚原、三井、他3人
遡行日:11年2月27日

塚原さんから沢の誘い。「千葉の沢？」
雑誌でだったか千葉の沢の紹介記事を読んだ記憶がある。
千葉にも沢登りの出来る沢がある事にちょっと驚いたもののそれだけ。その時は行って見ようなどとは思わなかった。
どんな沢なのか塚原さんもわからないと言う。ネットで調べてみると千葉の沢といっても沢は房総半島の内陸部辺りに集中していて、数本の記録を読んでおぼろげに渓相のイメージは浮かんできた。
標高が 2、300m程度の、山というより丘陵の沢、大滝も険悪なゴルジュもあろうハズはない。がしかし、別な何かがあるかもしれない…。スカかもしれないがとにかく一度行ってみなけりゃ何も分からない。
誘われなければ行く事はなかった沢、行けば話の種にはなる。果たしてどんな沢なのか行って体感してみよう。

＊＊＊＊＊＊＊

前日の夜、集合予定地に行く。
（今回の山行は塚原さんの知人がF会におり、その会が地域研究として房総の沢の踏査をしていて、その縁で今回の山行となった。）
名も知らぬ川の河原にF会の数人の会員が焚き火を囲んで酒をのんでいた。僕達も少しお相伴に預かり、話をして車で仮眠。やけに寒い夜だった。
いくら房総の沢とはいえ、まだ沢登りの時期ではないな、と思わせられる。

翌朝2パーティーに分かれ、それぞれ出合に向う。
僕たちが入渓するのは「伊保田沢」という沢。（房総の沢は名前の付いていない沢も多く、ここも仮称という事だ。）位置的には君津市からさらに南に下った辺り。近くには観光地の養老渓谷がある。
里山の雰囲気の溢れた田舎道を暫く走ると出合いで、路肩に車を止め沢に降りる。
平らな河原で、両岸が少しあがっているので何やら排水溝に入ったよう。水量は少なく靴底を濡らす程度。少し歩くとトンネルがあらわれ、水流はそのトンネルから流れている。これは「川廻し」と呼ばれている江戸時代に造られた房総の沢独特のものだ。
「川廻し」とは、沢が蛇行しているところをトンネルを掘って直線的に流れるようにしたもので、蛇行していた部分は田畑や植林地として利用されたという。
岩盤をくり貫いただけの素掘りのトンネルは、大きさや長さは地形に応じてまちまちで、小型の車なら通れそうなものから、人が屈んで通るようなものまで様々あるらしいが、ノミ一丁の手掘りでよくやるもんだ。
川廻しは一本の沢に何箇所も作られていて、この日別パーティーが入った沢には10ケ所もあったとの事だ。
トンネルを潜って抜けるとナメ床が続いているが特にどうという感じもない。
直に二俣となるが今回は左俣を登って右俣を下る計画なので左へ。
沢は何本かの「川廻し」のトンネルはあるもののこれといった変化も刺激もなく、単調で平板な沢床がひたすら続く。「沢登り」というより「沢ハイク」というべきか。
元々小沢がさらに小さく、少ない水流もなくなると沢形がなくなり、ほんの少し樹林を登ると汗をかく間もなく稜線にあがる。「まー、こんなもんだろう・」
稜線の踏み跡を歩き始めたのだがすぐ竹林となり、そこを抜けたと思ったら何と畑があり民家が建っている。思わず「エッ？」
稜線ではなく、単に丘陵の上にでただけという事か。畑には家人がおり、庭先を挨拶をして通る我々に家人も挨拶を返して何事もない。
梅の花が満開で水仙も咲いていてのんびりした里山の風景が広がっている。車道を少し進んで適当な所から右俣に降りる。
当然ながら左俣と同様、傾斜のないナメ床が続き、やはり幾つか「川廻し」があって沢の様

子は変わらない。
見覚えのある二俣に出、そこから僅かで車に戻って山行は終了。登り2時間、下り1時間半の山行だった。
近くの温泉に寄って汗（大して汗もかいていないのだが。）を流して帰途につく。

＊＊＊＊＊＊

初めての千葉（房総）の沢で、時期も冬真っ只中の2月、という事で常ではない何かを期待したのだがそれは叶わなかった。（強いて言えば川廻しというのはこの房総の沢にしかないものだがでもそれで沢が面白くなる訳でもないしね。）
房総の沢は基本、今回のような沢が多いようだ。
それでもF会は房総の目ぼしい沢を全て踏査して会の記念誌に纏めて発表するとの事。その取り組みはそれはそれで素晴らしいとは思うが僕にはそれは務まりそうもない。
多分僕に房総の沢の二度目はない。